性癖むぎゅっと詰め合わせ♡
LETM 作品オムニバス サンプル

痴漢さんと会陰開発 サンプル　1p
美形色白素人喰い サンプル　9p
うちのこオメガバース サンプル　18p

Produced by LETM

痴漢さんと会陰開発　サンプル

　ひらひらしたスカートが落ち着かない。すうすうするのに、ぴったりと締め付けてくる黒ストッキングも同様に。さらにその内側では、小さな女物のパンティの中で、納まりも悪くナニが縮こまっている。

　こんなの誰かにバレたら末代までの恥だ！空は思い切り視線を下に落し、電車の隅でなるたけ目立たぬように身をすくめた。

　ソーシャルゲームのイベントで、一番成績が悪かったヤツは、罰ゲームとして女装して電車に乗る事！！
……なーんて、悪ノリ野郎同士が好きそうな遊びに乗っかってしまったのが運の尽き。部活と勉強の合間にチョロリと弄る程度だった空は、栄えある最下位を飾ってしまったのだ。
（仕事忙しいって言ってたからどうせ影縫になるだろうと思ってたのに！！　ぜぇったい大人の力使っただろ！！　あの重課金厨めえっ！！　汚い！！　社会人って汚い！！　もうじき父親になるんだからちょっとは大人げっていう物をさぁっ！！）

　前半うんともすんともだったクセに、終了間際になって一気にぶっちぎってきた少し年上の友人を思い浮かべ、脳内で思いっきり悪態をつきまくってやる。が、それで何がどう変わる訳でも無い。

『乗ったけど、バレたら俺人生終わるよね！？』
　件の友人達が集まるライングループに、当初の予定通り電車に乗った事を告げる。すぐに既読表示がつき、次いでぽんぽんと素早いリアクションがあった。
『空〜頑張れ〜』
『大丈夫！　意外とクオリティ高かったし男だってバレないバレない！』
『ちゃんと●●駅まで乗れよ』
『バレたらそういう性癖の人として生きればいいじゃんwwww』
（もうやだコイツら他人事だからって！！）
　身勝手かつお気楽な意見を好き好きに述べる友人達にガッデムと心の中で叫んでから、溜息を吐いてスマートフォンを仕舞った。
　大丈夫。帰宅ラッシュのこの時間帯、満員電車の中でわざわざと、他の人間の恰好をマジマジ眺めるヤツも居ないはず。皆スマホに夢中か友人と愚痴るか疲れて寝ているかのどれかだ。目立たず騒がず大人しく、気配を殺して隅っこでじっとしていれば、まずもって気付かれる事などなかろうて！！
　という訳で、隅っこで地蔵を決め込む事にする空。最初は少し余裕のあった列車内も、駅に停まるにつれ人がなだれ込み、程なくしておしくらまんじゅう状態になった。彼の目論み通り、壁際にちんまりと追いやられている空の事をわざわ

ざ気に留めるような人間は居ない。よしよしこれは何事も無く終わりそうだと小さく安堵の息を吐いた時。
　尾てい骨の辺りに何かがそっと触れる気配があった。
（……？）
　誰かの荷物でも当たっているのだろうか。若干キワドイ位置に当たるそれが不快で、軽く身を捩って逃れる空。だがそうすると今度は明確に、尻たぶを狙って体温が這ってきた。ぎょっとして、思わず肩が竦み上がる。
（え……え……！？　これって……痴漢、だよな！？　俺、今、痴漢されてるの！？）
　どうしたらいいのか分からず硬直してしまった空に気を良くしたのか、探り探り触れては離れてを繰り返していた手がべったりと張り付いて丸みを撫で回し始めた。こうなると、もはや軽いパニックだ。
（どうしよう、どうしようっ。このままじゃバレちゃう。俺男なのに、こんな恰好して電車乗ってる事バレちゃうッ……！！）
　これが女装していなければ、何やってんだこの変態野郎が！　と一喝して公衆の面前に生き恥を晒してやるものを、ぶっちゃけ今はこちらも負けず劣らずの変態具合で公衆の面前に出てしまっている自信がある。目立ちたくない一心で、手を振り払う事も出来ず、声を上げる事も出来ず、どうしたらいいか分からなくなってしまっている空に対して、背後の

男がさらに大胆になっていく。
　スカートの中に手が忍び込み、ストッキングの上から尻の割れ目に指が食い込まされる。そのまま臀裂の具合を確認するかのように、何度も上下に撫でさすられた。緩慢で、こそばゆく、いやらしい手つきだ。思わず腰骨にゆるい電気が走る。その感覚を見て見ぬフリをしてぎゅっと唇を引き結んでいると、ついに手のひらは股の下にまで回ってきた。
「あ、やっ……！」
　これ以上されたら、本当にバレる！そう思った空がきゅっと股を締めて抵抗すると、背後からは、小さく笑う音が返ってきた。
「君……男の子でしょ？」
　耳元で囁かれた瞬間、さっと全身から血の気が引いていく。
「女の子にしてはお尻が硬いし……それに、ここにおまんこが無いもんねぇ〜」
「ッ……！」
　陰嚢とアナルの中間、ちょうど女性の膣の入り口に当たる部分を、指先がこすこすと刺激する。すると今まで感じた事の無い類の擽ったさが下腹部にぞわりと広がって、女物のパンティの中でペニスがひくんと脈打った。
「いけないなぁ。男の子がこんな可愛い格好して……そんなに痴漢して欲しかったの？　んん？」
　こちらが男だと分かったというのに、萎える所か一層興奮

した様子で、ねばっこい声色が耳元に纏わりついてくる。さらに、先程まで指が食い込まされていた尻に、固い質量が押し当てられて……それが何かなんて、想像に難くなかった。
「君みたいな、女装して雄を誘惑するいやらしい子には、おちんぽ性指導が必要だなぁ〜♡」
　空を背後から抱きしめるように前に回ってきた両掌が、強引に足の付け根を掻き分けて潜り込む。その手でむにいっ♡と外側に開かされ、隙が出来た内腿に、硬くて熱いものが挟み込まれる感覚が。
「ほらっ。バレたくなかったら大人しく太腿締めて。おじさんの勃起おちんぽ、お股に埋めて味わってね♡」
　成す術もなく、言われるままに太腿を閉じるしかない。性欲抜群な雄の象徴を柔い肉が感じ取り、腰がぴくんと跳ねてしまう。生々しく脈打つ肉の塊で、性器に近い部分をねっとり扱き回されると、なんとも言えない倒錯的な気分にさせられる。
（やだっ♡　おれ……女の子の格好して……っ♡　おじさんに、ちんぽ擦り付けられて……！♡）
「雄おまんこに、大人ちんぽがごしごし擦りつけられちゃってるよ♡　女の子だったら、おまんこの割れ目をちんぽで扱かれちゃってるんだよ♡　こんなえっちな事されたら、おまんこ発情してヌルヌルお汁が出てきちゃうよねぇ♡」
「ふ……♡　うぅ……♡」

　ずりっ♡　ずりゅっ♡　ずりゅっ♡　ずりゅっ♡　ストッキングのつるつるとした感触を味わうように、空の股間から、赤黒亀頭が顔を出したり引っ込んだり。前に回した両手を太腿に添えて、不躾な手つきでいやらしく撫で回されながら好き勝手に股を使われる。耳元で吹き込まれる卑猥な文句も含めての性感を煽る刺激に、若い体は興奮して、尻肉をぴくぴくと痙攣らせてしまう。さらに、面積の少ない下着から、隠しきれなくなったペニスがぴょこんと頭を覗かせた。
「おっ……なにか出てきたねぇ〜♡　おまんこ扱きされて、エッチなクリおちんちんで発情アピールしたくなっちゃったのかなぁ？♡」
「ん、んっ♡　んっ♡」
　カリッ♡　カリッ♡　カリッ♡　短い爪が、ストッキング越しに裏筋を掻いて弄ぶ。会陰と玉袋をぶっといおちんちんで責められている上に、男として一番気持ちいい部分にまで手を出され、尿道口から溢れたオツユがいやらしくストッキングを濡らした。
（ああっ♡　だめっ♡　ちんちんと、おしりのあいだのとこ♡　ちんぽでごしごしされるとぉっ……♡　お尻の奥がむずむずするっ♡♡　お股に力入らなくなっちゃうぅ♡♡　これだめっ♡　へんだよぉ……！♡♡）
　快感のあまり足の力が抜けて、膝を左右に開いてしまう空。その動きを感じ取り、男が口角を歪めた。

「あれ？　どうしたの？　そんな風にガニ股になって……女の子がおまんこ差し出して、おちんぽ下さい♡　ってハメ待ちしてるときの格好になってるよぉ？」
「ち、が……っ〜〜〜♡♡」
　こりゅん♡　こりゅんっ♡　カウパー液を滲ませた切っ先が、角度を付けて会陰をしこらせる。空は知る由も無いが、その内側にある前立腺を外側から責め立てる動きである。未知の快感がペニスの裏側を中心に下腹部に響き渡って、空はきゅんきゅんと尻穴と陰茎を疼かせた。
「ここでしょ？　ここにおちんぽハメ欲しいんでしょ？　大人ちんぽで素股ズリされてメス交尾乞いしやがって……すけべな悪い子だっ……！」
　徐々に呼吸が荒くなり始めた男が、力強い腰振りで空のおまんこを虐め抜く。だらしなく力の抜けた腿を外側から押さえつけ、「しっかりおまんこ締めなさい」と耳打ち。男の先走り汁でぬるぬるになった股間は、いつの間にか雄を悦ばせるための場所にさせられていた。
（ちんぽ♡　ちんぽされてるっ♡♡　電車の中なのにっ♡男なのにっ♡　ちんぽで気持ちよくされちゃってるぅっ♡♡おちんぽヌルヌルされるのエッチすぎるよぉ♡♡　もっと♡もっとズコズコしてっ♡♡　俺のおちんぽも扱いてっ♡♡もっと気持ちよくなりたいっ♡♡）
　空のはしたない内心を見透かすかのように、さらに男のピ

ストンが早くなり、陰茎の先端も手のひらで撫で回される。ともすれば周囲にバレてしまいそうな勢いであったが、昂った体は収まりがつかず、もはや快楽のみを追い求めてしまっていた。
（いく♡　こんなのイっちゃう♡　おまんこ扱かれてイく♡大人ちんぽでイきそうっ♡　あぁっ♡　イったらバレちゃうかもしれないっ♡　ザーメンの匂いでバレちゃうかもっ♡♡えっちな事してるのバレちゃう♡♡　あ♡　あ♡　でもっ♡でもぉ……！♡♡　もう、我慢、できないっ……♡♡）

美形色白素人喰い　サンプル

俺は、スケベな創作物に対してモブおじさんを派遣している世界モブおじさん協会……通称 WMA（World MOBOJI Association）から派遣された「性感マッサージモブおじさん」だ。

人通りの多い街頭で、マッサージのモニター募集と称して可愛い男の子に声を掛け、お店に連れ込み、スケベなマッサージテクで堕としてそのまま美味しく頂いちゃおう★的な、そういうプレイをするための変態モブおじさんだ！　皆よろしくな！

「じゃあ、よろしくお願いしまーっす」

本日のターゲットはこちら！　駅前の大通りでキャッチした、色白かわいこちゃんのユキ君だ！　既にうすっぺらい施術衣に着替えさせ、施術台にうつ伏せで寝転んで、後は俺の魔の手にかかるのを待つだけだ！

ちなみにお店には、エッチな気分になる魔法のお香を焚いてある。そして俺の手元には、ご都合主義の媚薬オイルローションもバッチリ用意してある。これからユキ君には、新手のマッサージと称して、このローションをたっぷり使ったヌルヌル性感おちんぽマッサージを心行くまで味わって頂くのだ。きっと真っ白な肌を桃色にして、キレイなお顔をだらしなく緩ませて感じてくれる事だろう。ああ、楽しみだ！

「では失礼しますね」
　背面がボタンになっているという都合のいい施術衣を腰まではだけさせ、たっぷりのローションを垂らしていく。事前に「オイルローションを使ったマッサージ」という旨の説明をしていたため、ユキ君が怪しむ事はない！
「あ〜……きくー……」
　普通のマッサージテクもある俺が、肩と背中を揉み解してあげると、とっても気持ちよさげな感想を漏らしてくれる。正直それだけでも十分可愛くて満足しそうになるのだが、今日の目的はもっと過激な事だ。気を引き締めねば。
　肩甲骨、背骨のライン、腋の下、横腹付近、脊椎の筋……触ると微妙にくすぐったい場所を、丹念に揉み解していく。
「はぁっ……」
　特に腋周辺は、リンパが集中しているからもぞもぞするのか、重点的にやっていくと耐え切れず呼吸音が零れるようになってきた。
「ん、そこ、ちょっとこそばい……っ」
「大分凝ってますもんねぇ。解れてくるまで少し刺激が強いかもしれませんが、ちょっと我慢して下さいね」
「んんっ……！」
　ぐいぐいと、窪みに親指を押し込めて脇腹に向かって下ろしていく。ぴくん、ぴくん、指が動く度、体が小さく震えている。

「ふっ……ふくっ……ぅっ……」
　言われた通り健気に我慢している様子で、喉奥で声を噛み殺しているユキ君。そうやって腋に意識が集中している所で、不意打ちで背面をずるりと撫で下ろした。
「ひぃッ！？♡」
「あ、くすぐったかったですか？」
「は、はぃ……あははっ……」
「すみません。一言言えば良かったですね」
　背筋が仰け反って、恥ずかしい声が上がってしまう。誤魔化すように笑いを零す様子がなんともまぁ。
「下半身もやっていきますね。お尻の下辺りから触っていきます」
「ん」
　ちっちゃなお尻の下、太腿が始まる辺りを手のひらで包み込み、ぐいぐいと膝裏に流していく。
「ん……ン……♡」
　キワドイ部分を触られて、ユキ君の吐息に色がついていく。腰とお尻が震えて、無意味にもじもじされていて、段々とエッチな気分になってきたのが見て取れる。
　内腿を鷲掴みにして円を描くように揉み込んだり、ふくらはぎを優しく流したり、足の裏をナデナデしながらツボ押ししたり。お尻のマッサージと称して尻たぶモミモミした時の反応が、一番良かったなぁ。

　そうやってしばらく導入をこなした後は、いよいよ本命だ。
「じゃあ次は仰向けになって下さい」
「えっ！？　……あの……」
「どうしたんですか？　何か不都合でも？」
「……い、いや……その……いえ……」
　ちょっと困った様子で、ユキ君が仰向けに寝転がり直した。
　エッチなお香を焚きつけられた空間で、媚薬入りのホットローションでじっくり背面をマッサージされて、体はすっかり発情スイッチが入ってしまっているようだった。居心地悪そうに足を閉じて擦り合わせている股の間では、興奮している証拠がテントを張ってしまっている。
「あ、あの……なんか、すみません……」
　俺の目がそっちに向いた事に気付いたのだろう。ピンク色になった顔を覆い隠しながら、恥ずかしげに謝罪してくる様子は生唾ものだった。
「大丈夫ですよ。人に体触られるし。気持ちいいとそういう風になっちゃう人も結構居ますから」
「そう、なんすか？　よかった……」
　まぁ、こんなもん口から出まかせだけどな！！
　触って欲しそうにぴくぴく自己主張しているおちんちんはひとまず見て見ぬフリを決め込んだまま、ぱっくり股を開かせる。そこに体を割り入れて、完全にマウントポジションを取ってしまう。

明らかにマッサージの範疇を超えている体勢だけど、えっちになり始めたユキ君も心のどこかで期待を煽られてしまっているらしく、疑問は唱えられなかった。それどころか物欲しそうに潤んだ瞳で俺の手の動向を注視してくる。エロい。
「ん……」
ぬくまった手のひらで首筋を包み込んで、肩に向かって流していく。普通にリンパを流す動きなんだけど、ムラムラしている体は少なからず性的な刺激として受け取ってしまうようで、ひくつく喉仏の奥で悩ましい呼吸が噛み殺されているのが見て取れる。
さらに手のひらを下に下ろしていき、腋からおっぱいを持ち上げるような動きで胸部全体にローションを塗り広げながらマッサージ。ぬれそぼった薄い布がユキ君の肌を透けさせて、当然ながらぽっちり尖っている乳首も美味しそうに強調されている。
「ふ♡　……ぅ、ん♡　ん♡　うぅ……♡」
手のひらで乳頭を巻き込んで磨り潰すたび、メスっ気の滲む声が耐え切れずに鼻から抜けてしまう。さらに摘んでクリクリ可愛がってあげると、俺の体を抱えた股がもじもじと擦り付けられる。
「そ、そこ♡　かんけい、ない……！♡」
「いえいえ。ここも排毒する穴ですからね。ちゃんと解してあげないと」

「ぁ……♡　は、んんっ……♡♡」
　しこしこ♡　くりくりっ♡　扱いて捏ね繰って撫で回して、丹念にローションを馴染ませて乳首を愛撫していく。おっぱいが気持ちよくなったユキ君がスケベに腰を擦り付けてくるものだから、俺も遠慮なくガチガチになったフロントをユキ君のお股で擦らせて頂く事にする。こんなのもう、入れてないだけでセックスしてるみたいな体勢だ。
「じゃあ次は足をやっていきますね」
　そうやってしばし、乳首弄りをしながらの疑似ハメを楽しんだ後、血が回ってアツアツになったユキ君のお股と俺のちんぽを、名残惜しいながらも一旦離れさせた。太腿を左右に大きく開かせて、恥ずかしい部分を曝け出す恰好を取らせる。が、まだおちんぽはオアズケだ。足の付け根から膝に向かって、内腿をヌルヌルマッサージ♡
「んく♡　くふうぅ……♡♡」
「お股に力入っちゃってますね〜。どうしました？リラックスリラックス♡」
「ふぁ♡　ひゃ、いぃ……♡」
　期待に満ち溢れている股間を、触ってもらえそうで触ってもらえない。そんなもどかしい刺激に下腹部から膝にかけてが突っ張ってしまっている。指摘されて力を抜こうとするものの、俺の手が動くたんびに腿が力んで、布の下でおちんちんを震わすのを止められないようだ。

「んー、やっぱりココがコリの原因かな？」
「ひはあぁあっ！♡♡♡」
　そうやって存分にもどかしくさせてから、いよいよ欲しがりなおちんちんに手をつけた。根元から先端に向かって、人差し指で一度素早く撫で上げる。それだけでもう、待ちに待った刺激を与えられたユキ君は、悦びの鳴き声を上げてくれた。
「ちょっと触るだけでこんなに反応しちゃうなんて……。よっぽど老廃物が溜まっているんですね。じっくり入念に解してあげなきゃ♡」
「あ♡　あぁ……♡」
　施術衣を押し上げている頂点に染みを作ってしまっているえっちなテントをナデナデして、粘液を引きながらトントンタップもして、これから与える快感への期待を煽ってあげる。おちんぽを気持ちよく性感マッサージして欲しくて堪らなくなってしまっているユキ君は、開いたお股を上下にフリフリ動かしちゃって、もうすっかり俺の手管の虜になってしまったようだ。
　手のひらでオイルを温めて、片手で竿を、片手で先端を包み込む。その動作だけで悩ましく呼吸を漏らすユキ君の、ぴくぴく脈打つ欲情ちんぽに、じっくり、じっくりローションをパックして染み込ませていく。
「あ♡　……あっ♡　あんっ……♡」

　そのうち、なんの動きもない状態が焦れったくて堪らないといった、媚びた呼吸音を漏らし始めた頃になって、優しく手のひらを握ったり緩めたり。薄い布越しに、ローションまみれになってしまったあっついちんぽをモミモミしてあげた。もうユキ君は、それだけでお目目をウルウルさせてメス声を零してくれる。俺のエロマッサージを全面的に楽しんでしまっているなんて、これだからヤりたい盛りのちんぽに逆らえない男は最高だぜ！
「随分凝ってますねぇ。めくって直接触ってもいいですか？」
　にちゃあ……。張り付いた薄い布を引っ張ると、粘着質な糸を引きながらちんぽから引き剥がされていく。
「へ……ちょ、ちょく、せつ……？　あ♡　や……だめ、だめっ……♡」
「……ダメですか？　勃起おちんぽ見られるのヤダ？」
「だ、だって、マッサージなのに、はずかし……♡」
　口でダメダメ言うだけで一切抵抗しないユキ君の、まずはパンパンのタマが徐々に露出されていく。布が剥がれていく感覚すら堪らないらしく、既に腰は施術台から浮きっぱなしだ。
「ほら♡　めくれて出ちゃいますよ♡　恥ずかしいガチガチおちんぽ見えちゃいますよ～♡」
「あ♡　あっ♡　やっ♡　ぺちぺち、しないれぇっ……♡♡」
　恥ずかしがる様子と布の刺激に身悶える様子がシコすぎる。

剥がした布をまたちんぽに纏わり付かせて、それから剥がして、さらに纏わり付かせて……意地悪でつい何度も繰り返してしまうと、ユキ君の声は益々甘く蕩けていった。

体が熱い。ひりつくように喉が渇く。頭がガンガン痛んで回らねぇ。視界が霞んでぼやける程体の内側が引っ掻き回されて、興奮して堪らない。

「なんッ、だよ……！　まだ二か月だろうが……！！」

震える指先で薬を取り出して、口に咥えさせる。その時に指が唇を掠めた感覚にすらこそばゆいものを覚えた自分に苛立って、諸々を掻き消すように水と一緒に流し込んだ。

「ハァッ……！」

鋭く呼吸を吐き出して、冷たいものが胃まで流れていく清涼感を味わう。

大丈夫。これで大丈夫。一晩もすれば落ち着くはずだ。今だけだから。自分にそう言い聞かせて、とろくさい足取りで寝室に向かった。

自分の周期を把握して、それに合わせて適切に抑制剤を飲んで、十代の後半以降もう十年近く発情とは無縁の生活を送ってきた。

だからこそ、久方ぶりのヒートは強烈だった。

ノミとコップ、という実験がある。

蓋つきのコップに入れられて飼育され、限界を決められ続

けたノミは、その後例え蓋が外されたとしても、蓋があった高さ以上飛ぶ事は無くなるらしい。本来はそれ以上飛べる能力があるにも関わらず、だ。

だから俺は、αβΩの階級分けや優劣のラベリングの裏には、一見平等に見せかけている現代社会の中で未だ脈々と息づいている支配階級の、都合のいいコントロールが掛かっていると確信している。

完全に平等になってしまっては困る。だったら分かりやすいΩを劣っている事にしよう。Ωはこんなに不都合で困った特性があるから、社会的には弱者の立場に当たるのだ。と、社会全体やΩ本人に擦り込んでいるのだ。

バカバカしい。

確かに発情は少し厄介だが、今は質のいい抑制剤が安価で手に入る時代だ。発情さえ自分でしっかりと管理すれば、βやαと遜色無い同じ人間として生きられる。勿論Ωらしく生きたい奴はそうすればいいと思うが、俺の性には合わないし、Ωだからという理由を振りかざして自分の人生を嘆いて可哀想ぶるなんて寒い事はもっとしたくない。そんなモンただの体のいい言い訳だ。

性が何であろうが、俺は俺だ。

そこには誰からのラベリングも必要無いし、俺が何者かなんて自分自身で決める。

だから、初めての発情があって以降規則的に薬を飲み続け

て体調管理を徹底し、Ωである事をクローズドに生きてきた。三月に一度抑制剤を使う事以外俺はβと何ら変わりなかったし、何ならα性と勘違いされる事すらあった。不自由に感じる事は何一つなくて、ともすれば自分がΩである事なんて、忘れてしまう程だった。
（親にたまに会うと「Ωの男のコって、もっと可愛く育つもんと違うんか……？」と、逆に愕然とされる）
　ほら見ろ支配階級のバカ共が。
　テメェらの安っぽいコントロールなんざ、今のご時世、もう流行んねぇんだよ。

　カチャ……。
　起きているか寝ているかも曖昧な程朦朧とする中で、控えめに玄関の鍵が開く音を聞きつけて、はっと意識が戻って来る。
　もしかして戸締りを忘れでもしただろうかと一瞬肝が冷えたが、こんな時だからこそ確かに施錠を確認した記憶がある。だったらもう、スペアキーを持っている人間なんて一人しか居ない。ごそごそとリビングの方から聞こえて来る物音を聞きながら、起こしかけた体を再度ベッドに沈み込ませた。
（……って、やっぱダメだ！！）
　と、思ったが、例え不審者でないとはいえ、別の不都合が

思い当たって矢張り飛び起きた。体を引きずりながら寝室の扉まで歩き、施錠を確認する。その際にガタンと大きな音を立てて扉に寄りかかってしまい、向こう側から驚いたような気配が返ってきた。
「む、武蔵君？　起きてたんですか？」
　心当たりの通りの声だった。月影さんだ。
「具合どうですか？　お粥とか、ゼリーとか、お腹に入れやすい物買ってきたから置いておきますね」
「……うん、ありがと……」
「風邪薬も一応買ってきましたけど、何なら病院行きましょうか？車出しますよ？」
「だ、大丈夫だから……！　大した事、ねぇし。一晩寝れば治る……」
　思いがけない発情の兆しがあって、体調不良を理由に仕事を早引きした俺を、会社のヤツ全員が風邪か何かだと思い込んでいる。もちろん月影さんだってそうだ。だからこそこうやって、見舞いに訪ねて来てくれたんだろう。
　困った事に、月影さんは正真正銘のα性だ。
　今月影さんと顔を合わせたりしたら、フェロモンで確実に俺がΩだという事がバレる。それだけは避けたかった。
「ワリィけど、今、ゆっくり寝てたくて……」
「……」
「それにほら、伝染すとマズいから……な？　今日はもう帰

って……」
「……武蔵君」
　だというのに、精一杯取り繕おうとする俺の健闘虚しく、次に扉の向こうから聞こえてきた俺を呼ぶ声は、明らかに普段の月影さんのソレじゃあなかった。
「何だか……すっごくイイ匂いがしますよ……？」
「ッ……！！♡」
　扉越しでも腰骨が蕩けそうになるくらいの、本能のレベルで情欲を煽り立てる空気感と声色のせいで、一気に体の芯がざわめき出す。逆の立場の月影さんも同じ類のものを感じているのかと思うと、絶対に誤魔化しなんて効かないんだぞという現実を、自分自身の体の反応をもってまざまざと思い知らされた。
「ね、開けて？」
「……」
「武蔵君、Ωなんでしょ？」
「……」
「大丈夫。今気付いたんじゃないです。前から知ってました」
「へぇっ……！？」
　思いもよらない言葉に、素っ頓狂な声が零れた。
「これでもαの端くれなので……普段の匂いでも、なんとなく分かってしまって。でも、Ωだろうが武蔵君は武蔵君ですし、本人がオープンにしたくないのなら、私が言及するよう

な事ではありませんから、何も言いませんでした」
　何、だよ。ソレ……。
　心配が杞憂だったっていう安心感と、隠す事そのものが無駄な労力だったんだって知らされた徒労感とで、今度こそ全身の力が抜けてへたり込む。
　同時に、俺がΩだと知っていても、何を言う訳でもなく口外する訳でもなく、ずっと俺を俺として扱ってくれていた月影さんの心意気が、じんわり臓腑に染みていった。
　心臓が締め付けられて堪らない。
　ヒートの興奮に、感情の昂りまで加わって、みるみるうちに涙腺が緩んでいく。
「ヒートの時に、αとセックスした事ありますか？」
　無いに決まってる。というよりも、突っ込まれる側でのセックス自体経験した事が無い。
「天国見えちゃうくらい気持ちイイらしいですよ」
　そんなのわざわざ言われなくても、もはや想像に難くない。だって今俺、扉越しの月影さんの声と気配だけでもう、気持ちよすぎて泣けてきて、頭がどうにかなりそうだ。
「いつも私の事慰めてくれる武蔵君に……」
　この向こう側に居る人の事が、欲しい欲しいって、べったりドアに凭れ掛かりながら股間を弄ってる俺の格好は、端から見ればさぞ滑稽な事だろう。
「最高に気持ちいいセックス」

さらに声が近くなって
「味わわせてあげたいなぁ……♡」
「んんっ……！！♡♡」
ぴったりと扉に唇を押し付けているんじゃないかと思うくらいよく響く声が、同じく扉に張り付いた俺の頭を伝って脳みそを震わせた。
限界まで溜まったコップの水が、零れて落ちた瞬間だった。

そもそも俺と月影さんは、今回の件を抜きにしても、元からセックスする間柄だった。しかも、Ωの俺がαの月影さんを抱くという、本来の性とは真逆の奇妙な関係で。
月影さんは少し、いやかなり変わっていて、αにも関わらず自分がウケ側になるアナルファックにドハマりしているビッチだった。何でも死に別れた奥さんが、同じαでもちょっと逆らえないレベルに血の濃いαで、バリタチ気質のフタナリ相手に散々開発されてしまったのだとか。
αを組み敷きたいβは多い。時には自身の境遇に不満を持つ歪んだΩにも芽生える欲求だ。自分より優れているとされる人間をマウンティングする事で、劣等感の裏返しである優越感に一時でも酔いしれたいのだろう。そういう意味で月影さんは、整った容姿である事も相まって、引く手数多の様子だった。

だけど俺は、αだの何だの関係なく月影さんの事を尊敬していたし、一人間として大好きだった。だからこそ、下らない奴らのストレス発散に使われているなんて知った時には、それこそ我慢がならなかった。

ヘンな野郎相手に性処理程度の目的で抱かれるに相応しい人じゃない。

だったら俺が面倒を見る。男に抱かれたいんだったら、俺が引き受けてやりゃあいい。だからもう、どこの馬の骨とも知れない男と寝るのは止めろ。

そんな、憧れが取り違えられた好意から始まって、セフレからなんやかんやの紆余曲折があり、プライベートでも大切な相手になっていった。当然月影さんに俺のΩ性がバレているとは思っていなかったし、知られてしまえばもうこの関係を続ける事なんて出来っこないとも思っていた。だから尚の事、月影さんにだけは知られたくなかった。墓場まで持っていくつもりだった。

それがまさか、全部知った上で俺と一緒に居てくれていたなんて。

疼いて熱っぽくてどうしようもない股の間を、月影さんの舌でしらみつぶしに宥めすかされる。

「はっ♡　んあ、ぁ♡　あはぁぁ……♡」

ちんこの先っぽを口の中でくちゅくちゅ嬲られて、雁首の段差を抉られて、血管を舌先で辿られて、裏筋をベロ全体でねっとり舐め上げられて、玉まで念入りに転がされて……。ただフェラチオされているだけでも、気持ちよすぎる刺激に開き切った股がぴくぴく震えて、もうどうにでもして下さいって体が降参しちまうくらい凶悪なのに、当然の如く舌はさらに奥まった部分まで伸びてくる。

「ひンッ……！♡♡」

熱い粘液が溢れているのが自分でも分かる場所に、ぴとりと舌が触れると、ビリビリ痺れるような快感に腰が仰け反った。さらに、唾液がたっぷり絡んだソレを優しくヌルヌル擦りつけられて、俺の意思とは無関係に、入り口は柔らかく綻んで大歓迎の体勢になっていく。

「ぉ、あ♡　あ♡　ふぁぁ、ああぁ……♡♡」

逃げそうになる腰を、腿の後ろからケツに手を回してホールドされて、舌のさきっぽをつぽつぽ抜き差しされて……

ちゅっ♡　ちゅるっ♡　ちゅばっ♡　ぬちぬち♡　くちゅっ、ちゅうっ……♡

いつもはフェラの時にやるような、大サービスのやらしいリップ音が、聴覚からも俺の事を煽り立ててくる。残念ながら俺はといえば、このわざとらしい音が大ッ好きだ。腹の奥から疼いてどうしようもない場所に、こんなエロいのされようもんなら、一刻も早くナカをほじくって欲しくて堪らなく

なるに決まってる。腸壁がせわしなく蠕動して、とめどなく愛液が滲んでぬかるんで、入り口がはくはく物欲しそうに収縮して、完ッ全にちんぽ咥えこむ穴として目覚めさせられた所で、舌の脇に一本、指が添えられる感覚があった。
「んあぁ……！♡」
　入り口を弄んで様子を伺った後、ぬるぅ、と、潤んだ中に潜り込んで来る。指先は、腹側の粘膜を重点的に詮索して、すぐに俺自身も知らなかった気持ちいい場所を探り当てた。
「ア゛あ゛ぁッ！？♡」
　ちんぽの裏側をぐっと押しつぶされると、条件反射で腰が飛び上がる。直後に今度は優しく撫で擦られると、そこを中心にして下半身全部が蕩けていってしまいそうだった。
「こーこ♡　武蔵君がいつも私の事気持ちよくしてくれる場所ですよ。自分で体験してみてどうですか？」
「や♡　んンン゛♡　やらっ♡　やらあぁっ♡♡　そこヘンになるっ♡♡　こりこりしないれえ゛ぇッ♡♡」
「ああ、そんなに気持ち良いの……？　奥の方も、Ωはもう一つ気持ちいいんだろうなぁ……♡　はぁ、羨ましい……♡」
　ビッチならではの意見をぽろりと漏らした月影さんは、さらに指を増やして気持ちいい部分を嬲ってきた。指の腹から根本まで余す所なく使って、二本の指でじっくり、じいっくり揉み込まれる。
「はあぁ♡　はっ♡　へ♡　ぁ♡　あはあぁ♡♡」

それがあんまりキきすぎて喘ぎ声が止まらなくなった口から、だらしなく唾液が零れ落ちた。ちゅこちゅこ、ぐちゅぐちゅ、本来は濡れるはずのない所から、恥ずかしい音が響いてくる。他でもない自分自身が大喜びで濡らすおかげでどんどん滑りが良くなって、ぬるぬるのまんこはどんどん気持ちよくなる一方だった。

「すごい……ホントに濡れるんですね」

思わず、といった様子で月影さんが呟いた。俺もそれに関しては同意見だ。自分の体だとは思えない。

「ん゛ぁ……！　ひろげんなあ゛ッ……！♡♡」

にゅぱぁ……♡

さらに増やした三本の指で、穴を無理矢理広げられる。すうすう空気が入り込んできて、慣れない感覚に腰がぞわぞわ打ち震える。そのまま何度も、閉じたり、開いたり、緩み具合を知ら占めるようにしながら抜き差しが繰り替えされた。

ダメだ。手マンだけでももうヨすぎる。これからセックスするんだって、体にしっかり言い聞かせられてる感じがする。すっげぇ欲しくなる。もっと欲しくなる。ちんぽハメて欲しくて堪らなくなってきてる……♡

「武蔵君、腰動いてる……♡」

「っ、らって♡　らってぇ……！♡♡」

あまりの物欲しさに、上下に揺すってしまった腰の動きを、指摘された所で止まらない。むしろ、欲しい欲しい早く早く

って、さらにアピールしてしまう。
喉奥で笑って指を抜き取った月影さんが、ベッドサイドの引き出しに手を伸ばした。勝手知ったる様子で取り出されたのはコンドーム。
いつもは俺が月影さんにハメる時に使うそれが、今は俺にハメるための月影さんに使われる。その時の月影さんの、獲物をロックオンしましたみたいなウットリした目ときたら！
そうだよコイツ、バリタチαの嫁さんに開発されまくっちゃった人畜無害のクソビッチですみたいなツラしておきながら、その実他でもないバリタチαの嫁さんをモノにして孕ませて子供まで産ませてんだからな！その時点で大概なんだよなぁ！！
「初めてだから……バックが楽かな？」
「ぶっ」
仰向けの体勢から、ころんとうつ伏せに寝かし直される。枕にぶつかって間抜けな声を出す俺のケツを持ち上げて、そしていよいよ、熱っぽい塊が押し付けられた。
「ひっ……♡♡」
ぞくぞくと尾てい骨から背筋にかけてが粟立っていく。
（あ、あ……おれ、今から、月影さんにハメられ……♡）
「ああぁぁあ……ッ！！♡♡」
いよいよもって現実を痛感した瞬間、滑らかに入り込んでくる他人の体温。質量。

「はっ……はあぁっ……♡　ひ、は……ぁあ……♡♡」
　簡単に奥までの侵入を許した場所が、大喜びでナカのちんこにキスしてるのが、自分でもよく分かってしまう。熱い。腹いっぱいだ。ぞくぞくする。気持ちいい……♡
「か、簡単に入っちゃった……痛くない、んですか？」
　拍子抜けしたような月影さんの声を聞いて、がくがく首を縦に振る。
「ぜんぜんっ、いたくねぇ……♡　なにっ、なんでっ♡　おれ、はじめてなのに♡　なんで、こんな、きもちぃんだよぉ……！♡♡」
　痛いどころかむしろ、初めてのちんぽが嬉しくて気持ちよくて、思わず涙ぐむ程だった。ふにゃふにゃになった情けない声を上げる俺に対して、「良かった」と呟いた月影さんが、ゆるゆる、ナカを掻き混ぜ始める。
　ぬーちゅっ♡　ぬーちゅっ♡　ぬーちゅっ……♡
　根本までハメたまま、大きくは動かさないストロークで、愛情たっぷりにちんぽのしゃぶり方を教え込まされる。発情期の、ハメられる事が嬉しくて堪らないまんこを、ゆっくり丁寧にちんぽで扱いて貰える快感といったら……筆舌に尽くしがたかった。
「ぁ♡　あっ♡　ゆっくり、されんの♡　きもちぃ♡　なに♡　なにこれぇ♡♡　まんこひらいひゃうぅ……！♡♡」
　勝手に股がどんどん広がって、奥の奥まで無防備に力が抜

けていく種付け穴を、自らぐいぐいと月影さんの腰元に押し付けてしまう。こんなの知らない。俺の意思じゃない。頭とは関係なく、体が大喜びで月影さんに媚びて媚びて仕方ない。

　そんな俺の頭に、するりと月影さんの手のひらが滑ってきた。指先で柔らかく髪を梳かれて撫でられる。慈しむような手つきのおかげで、心も体も益々気持ちよく感じさせられていく。

「武蔵君、沢山、たーくさん頑張ってきたんですよね。折角Ωに生まれたのに、こんな気持ちいいセックスも知らないで、βっぽく振る舞って、挙句私みたいなどうしようもないαの面倒まで見てくれて……」

「あ゛♡　ああぁッ♡　はあぁ゛ぁっ……！♡　きもひっ♡　おちんぽきもちぃ♡♡　はつじょうきのセックス、きもひいぃのぉおっ……♡♡」

「ん。初めてのヒートセックス、気持ちいいですよね。これからは私が沢山甘やかしてあげますから、発情の度にめいっぱい気持ちよくなりましょうね♡」

「らめ♡　ん゛っ♡　こんなっ♡　こんなの♡　ぉッ♡　クセになったら、は、あぁ゛♡♡　おれ、だめになっひゃ……ん、あッ♡　あ♡　あぁあ゛あ゛ッ♡♡」

「大丈夫。武蔵君一人くらいダメになった所で、どうとでも養ってあげられますから。安心してダメになってくれていいですよ♡」

耳元で、男として最高に惨めな約束をされているのに、ぐずっぐずのケツの穴をちんぽで優しく捏ね繰られながら言われてしまうともう、それだけで心の底から悦びが込み上げてくる。嬉しい。嬉しい。気持ちよくて堪らない。ダメにさせられたい。この人とずっとセックスしていたい。月影さんのちんぽ専用になって、ずーっと気持ちよくハメてて貰いたいっ……♡♡

「武蔵君」

そんな風に、思考回路がバカになり始めた所で、頭のすぐ後ろで月影さんの声が響く。

「ココ……噛んでいい？」

その後、柔らかい唇がうなじに触れる感覚も。

「〜〜〜〜！！♡♡」

言われた瞬間、頭の天辺から足の指先まで、言い逃れ出来ない程の歓喜と期待が駆け抜けた。中に居る月影さんを、思いっきり締め付けてしまう。

「だ、だめ……♡」

「だめ？　何でですか？」

「だって、ぁ♡　ら、ってぇ……♡♡　か、まれ、たら♡　おれ、ぇ……♡　うれしく、なっちゃう、から♡　ほんとに、Ωになっひゃ……あぁ♡♡」

「武蔵君はΩでしょ？」

「ちがっ……そう、だけど♡　そうじゃなくてぇ……ッ♡♡」

項で唇が動く度、下腹部全体がきゅんきゅん痙攣する。体はもはや月影さんの番になる気満々で、早く噛んで、早く噛んでって、その瞬間を待ち望んでいた。

（続きは製品版で）

HP にも作品掲載しています↓
https://letmcre.com/